

宮田 和樹 (みやた・かずき) 先生

株式会社実業之日本社

マーケティング部/コンテンツ事業部 主任

株式会社実業之日本社 マーケティング部及びコンテンツ事業部主任。

1972 年生まれ。慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程修了。

オーストラリア、ウズベキスタン、アメリカ南西部での旅と思索を経て、
2001 年からウェブ業界へ。

ヤフー株式会社、マイクロソフト株式会社にて、ポータルサイトの
トップページやパーソナライズサービスの企画を担当。

2009 年8月から、現職。

主な担当に、電子書籍版『志高く 孫正義正伝 完全版』の企画、
『仕事ができる人はなぜ「あそび」を大事にするのか』のマーケティング、

『ブックビジネス2.0 ウェブ時代の新しい本の生態系』企画(印刷版・電子版)など。

主な作品に、「デジタル・ブーメラン」(『10+1 No.8 特集=トラヴェローク、トライブ、
トランスレーション — 渚にて』、INAX 出版、1997 年)など。

主な論文に、「ノマディック・トラヴェロロジへの試み—ブルース・チャトウィンにみる
ノマディズムとトラヴェローク」(『記号学研究 20』、東海大学出版会、2000 年)など。

ツイッター: @kazuqi



《講義概要》

株式会社実業之日本社マーケティング部及びコンテンツ事業部主任として、電子書籍の企画等に携わり、出版ビジネスの発展に尽力する宮田和樹氏が、2011年の電子出版の特徴や今後の可能性について講義を行った。

講義では、年々進化し続ける電子書籍について、まず Amazon の Kindle を例に米国 IT 企業のプラットフォーム戦略を紹介。多彩な機能や利便性について詳しく解説するとともに、電子書籍の今後の展望を考えるにあたり重要なポイントを示した。

また、今までにない読書体験アプリが次々と登場している現状について、実演を交えて紹介。「紙の本の置き換えでないデジタルならではの表現やインターフェースを可能にする」新たな読書方法の魅力を伝えた。さらに、Google Books と電子図書館についても具体的に説明し、本の電子化には多くのメリットがある反面、著作権の問題等を抱えている実態を示した。

デジタル技術が発達する中での今後の出版ビジネスのあり方について、学生が深く考えるきっかけとなった。

《受講生の感想》

●電子書籍については漠然と iPad などでは本が読めるのだろうなと思っていたが、読んでいる本の途中で辞書、メモ、インターネット、線引きなど様々なことができることが分かった。線を共有できるというのも驚きであった。電子出版の利点をたくさん知れて魅力を感じた授業でした。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●電子書籍は現代の社会にとっても適していると思う。若者の活字離れが進む中で書物の魅力を感じさせることができるものであると思う。私も普段はあまり本を読まないが、電子書籍は手に取りやすく興味をそそられた。さらに、デジタル産業全体の課題でもある著作権問題についてももっとよく考えていきたいと思う。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●電子書籍がこれから先さらに普及していく中で著作権の問題をしっかりと考えなければならぬと思いました。電子書籍は私としてはもっと色々な場所で活用できると考えます。なので、著作権の問題が解決され、利用者が著者にも嬉しいコンテンツになってほしいと思います。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●一番私が興味を持ったのは、著作権者の許諾がなくても本や雑誌がすでに電子書籍化されており、今は館内での利用に留まっているけれど、将来にはネット上でいつでもどこでも誰でもダウンロードして読むことができるかもしれないというお話です。利用者にとってはとても便利で素晴らしいことだと思います。

立命館大学・文学部・3回生

●遊びながら体験して理解を深めたり、読書の過程を共有できるのは、大人だけでなく子どもにも受け入れられそうだし、応用の場は増えそうです。電子書籍のように気軽にどこでもいつでも利用できるものは需要も増えていくだろうと思います。

立命館大学・法学部・4回生

●今までは本＝紙という考えが根付いていて電子書籍には全く興味がありませんでした。でも今回の講義を通じて電子書籍の魅力や可能性というものを感じ、一度使ってみたく感じました。最近の若い人たちは本と触れ合う機会が大きく減少しているので様々なアプリを併せ持つ電子書籍はこの問題を解決できるのではないかと思います。

立命館大学・映像学部・2回生

